

中学校における学力向上のための動機づけと授業方法の考察 —外国語教育を取り上げて—

09L010 長谷川 智

1. 研究の背景と目的

私は大学で教職課程を履修し、将来英語教師として働くことを目指して指導法や教育心理学の学びを深めてきた。中学校へのインターンシップや教育実習を通して実際の授業現場を参観し体験していくにつれて、生徒が英語に興味を持って授業に取り組む重要性を考えるようになった。実際、私自身も高校時代に、先生によっては英語を楽しんでいると感じて真剣に取り組もうと思った経験や、逆に先生によっては授業に面白さを見出せず授業に参加したくない気持ちから英語学習に対するやる気が失われた場面があった。

生徒の成績を上げるためには、本人に学習しようという意欲が存在しなければならないだろう。現に、辰野は『学び方の科学』において、「勉強の能率を上げ、よい成績をとるためには、本人がやる気を出すことが大事です。教師や親がどんなに環境を整え、優れた教材を用意し、教え方を工夫しても、本人にやる気がなければ効果はありません¹」と述べ、生徒の成績を上げるためには本人のやる気が不可欠であることを主張している。また、中野誠之・佐野富士子は「中学校英語学習における動機づけを高める指導ストラテジー」において、実際に中学2年生54名に対してアンケートと生徒の英語力を問う問題を実施して動機づけと生徒の英語力の関連を研究した。その結果、生徒の英語の設問の正答率と、「英語が好きである」、「英語は得意である」、「将来英語は必要である」という意識は強い関連傾向があることがわかり、英語の学力を高めるには「英語が好き」という内的動機を持たせることの必要性が高いこと、英語に内的動機を持てるようになるためには、「自分にはできる」という成功感が必要であること、自分の将来に英語は必要であるという外的要因は、英語の学習動機として効果的なものであること、「英語が必要」と意識している生徒に関しては、それが安定した学習動機になると考察している²。

では、実際に生徒はどのようなときに「英語が好きだ」、「英語は得意だ」、「自分には将来英語が必要だ」と感じるのだろうか。そして、教師はどのような方法で以上のような意識を生徒に感じさせることができるのだろうか。

本研究では、主に生徒への動機づけに注目して、学力向上のために必要な動機づけを挙げ、生徒はどのようなときに学習に対する高い意識を持つのかを調査し、生徒に学習に対するやる気を持たせるために教師はどのような授業をするべきなのかを考察する。なお、本研究は「学力向上のための」と記しているが、中学校の外国語教育における学力向上に焦点を絞って研究を進めるものとし、学力を「おぼえたり、習得したりしたものをその法則や成り立ちを理解しながら系統的に認識する部分³」に限定して研究を進める。これは定期テストで高得点をとれるようになることと対応している。

2. 研究方法

本研究では、まず動機づけの定義を述べ、学力向上と動機づけの関連性を示す。次に先行研究から得られた動機づけと学力向上の関連性についての結果を説明し、その結果に基づいて学生に行ったアンケートの結果を示す。アンケート作成に関しては、中野誠之・佐野富士子「中学校英語学習における動機づけを

高める指導ストラテジー」における研究成果を参考にする。アンケートの主な内容は、「中学時代にどのような場面で英語が好きだと感じるか」、「どのような場面で英語が得意だと感じるか」、「なぜ将来英語が必要だと感じるか」を問うものである。最後に、アンケート結果から得られた動機をどのようにして授業に反映させることができるかを考察する。

3. 動機づけとは

3-1 動機づけの定義

まず動機づけの定義について述べる。桜井は『子供のころ 児童心理学入門』の中で「当たり前のことですが、私たちは『……がしたい』という思いがあってはじめて、それらに見合った行動を開始し、それがうまく進めば、『……がしたい』という思いを成就することができるのです。動機づけ (motivation: “モチベーション”ともいう) とは、まさにこのような過程を示したことです。正確に言えば『ある行動を引き起こし、その行動を持続させ、一定の方向に導く過程』です⁴と述べている。加えて辰野は、「動機づけは、行動を引き起こし、方向付け、それを持続し、実際に成就あるいは達成をもたらすことをめざしています。これは、意欲を高めることです⁵と述べている。そこで本研究では、「動機づけとは他者が人にやる気を出させるように振る舞い、行動を引き起こさせ、方向付けをさせ、持続させ、実際に目標を達成させるための過程」と定義して研究を進める。

3-2 学習と動機づけの関連

では、学習や学力向上と動機づけにはどのような関連があるのだろうか。「1. 研究の目的と背景」でも述べたように、辰野は生徒の成績を上げるために生徒自身がやる気を出すことの重要性を強調している。更に辰野は、「そこで、昔からやる気を出させるにはどうしたらよいかが問題となり、心理学では『動機づけ』として研究されてきました⁶と述べている。また、中城は「いずれの学習の事態においても、人は何らかの理由で、学習意欲を有して積極的に学習に取り組んだり、あるいは学習意欲を失って学習から遠ざかってしまうことがある⁷と説明しており、辰野と中城の見解から人間はやる気や意欲を持つことによって積極的に学習に取り組むことができ、やる気や意欲を持って学習に取り組むことができれば個人の学力向上へと導くことができるということがわかる。逆を言えば、動機づけがうまくいかなければ人間のやる気や意欲が減少することへとつながり、学力の低下を招く結果になる可能性があることがわかる。以上のことから、学力と動機づけには密接した関連があり、教師が生徒の学力向上を目指す際に動機づけは重要な役割を担っていると言える。

3-3 外発的動機づけと内発的動機づけ

動機づけは一般的に外発的動機づけと内発的動機づけの2種類に分けられる。

鹿毛は外発的動機づけと内発的動機づけの区別について、読書感想文の宿題をこなすために本を読むというように、「手段」としてある活動に取り組んでいるような心理状態を総称して外発的動機づけ (extrinsic motivation)、読書そのものを楽しみや喜びを見出している場合のように、ある活動そのものが「目的」であるような心理状態を内発的動機づけ (intrinsic motivation)⁸と区別している。辰野も鹿毛と同様の区別の仕方をしているが、彼はそれぞれの理論の立場から外発的動機づけと内発的動機づけを区別している。辰野によれば、外発的動機づけは学習活動そのものとは直接関係のない賞罰や競争によって学習意欲を高めようとする行動理論の立場であり、内発的動機づけは興味や成功・失敗についての

見通しなどによって学習活動が引き起こされると考える認知理論、人間性の理論の立場だと主張している。認知理論、人間性の立場から主張される理由は、子供は、生得的に学習し成長しようという欲求をもっており、もともと活動的で好奇心に満ちており、新しいことを学び、問題を解決することに喜びを感じるからである⁹。

以上のように動機づけは2種類に分類されているが、教育においては生徒の内発的動機づけが重要視されている。実際、辰野は「学習指導では、内発的動機づけに訴えることが重要だと言われている」¹⁰と述べている。さらに、桜井によると、最近では「自ら学ぶ意欲」という言葉が教育界でよく用いられており、これは内発的動機づけを特徴づける「自発性」の観点を重視した学習意欲のことだという¹¹。

では、外発的動機づけは教育上重要視されていないのだろうか。辰野は「内発的に起こった行動も、外からの報酬（称賛、承認など）によって一層自己効力感を強めることがあります」¹²と述べ、外発的動機づけが内発的動機づけに良い影響を与えることを強調しており、「実際の指導では、外発的動機づけによる行動を内発的動機づけによる行動に変化させ、学習活動そのものに興味や喜びをもって学習するようにすることが理想です」¹³として、教育活動の中で外発的動機づけと内発的動機づけをリンクさせることを主張している。さらにケラーは、内発的・外発的動機づけという概念については、多くの場面でその一方のみが働いているという2分法で語られていることが多いが、人間とその課題の複雑性を考慮すれば、ある特定の場面では2つの要素が複雑に絡み合っていると考えるのがより自然だろう¹⁴と述べ、外発的動機づけと内発的動機づけが絡み合って教育活動が行われていることもあると説明している。もちろん、メリットのみが存在しているわけではない。その例として、ケラーによれば「内発的に動機づけられた課題に対して外発的な報酬を付加すると、行動の頻度や期間が少なくなる」¹⁵と述べられている。このことから、外発的動機づけは内発的動機づけを手助けする役割として重要な意味を持っているが、状況によって使い分けが必要となること、教育上においては外発的動機づけと内発的動機づけをリンクさせて教育活動を行うことが望ましいことがわかる。

3-4 中学校外国語教育の動機づけに関する研究

本研究では、アンケート作成に関して中野誠之・佐野富士子「中学校英語学習における動機づけを高める指導ストラテジー」における研究成果を参考にする。そのため、ここでは上記論文の研究結果を述べる¹⁶。

中野は同論文で「学力低下」の背景にある「学習意欲の低下」が真の問題であることを指摘し、中学校での英語学習の動機づけに焦点を絞り、それらを高めていくために効果的な指導ストラテジーはどのようなものかについて探っている。

中野はまず、学校教育の場で中学生の学習意欲が実際にどのような要素や事柄に影響を受けているのかを明らかにするためにパイロット調査で質的データを取り、その分析結果を用いて量的データ収集のためのアンケート項目を作成し、公立中学校2年生54名を対象に、学習の動機を調査するアンケート調査を行った。

パイロット調査では、公立中学校4名に対して1対1のインタビュー形式を用い、英語の好き嫌いについて、学習全般への意欲や動機を喚起した授業、先生の助言、指導、クラスの雰囲気、友人の様子についての6項目の質問で調査を行った。

パイロット調査の結果、中野は、①勉強する気が起きた、あるいは起きなかった授業について、やる気が起きた授業は「教え方が丁寧な授業」、「わかりやすい授業」という回答がほとんどであり、反対にやる気が失われた授業は「書き写す、なぞるような単調な授業」という回答が多かった、②勉強する気が起きた、あるいはやる気がなくなった先生の言葉や指導については、やる気が起きた教師の言葉は「よくで

きた」、「素晴らしい」、「よく頑張った」などの褒め言葉であり、教師からのフィードバックが少ない場合はやる気が下がるという回答が多かった、③勉強する気が起きた、あるいは起きなかったクラスの雰囲気、周囲の友人の様子について、やる気が起きたクラスの雰囲気は「勉強ができる子が多いクラス」、「授業中話す子が少ないクラス」、「同じくらいの成績の子がいるクラス」であった、④授業と勉強意欲や授業外での学習行動との関連については、授業がある時期からわかって楽しくなり、予習を自分で進めるようになって得意科目となった生徒がいた、⑤英語に関する好き嫌いについては、2名が好き、1名が普通、1名が嫌いと回答していた。好きと答えた生徒に関しては、活動的な授業が多かったこと、幼いころから英語に触れる機会が多かったことが原因となっており、嫌いと答えた生徒に関しては、ライティングに苦手意識を感じてしまったこと、授業中にクラス内で私語が多い雰囲気であったことが原因であった、⑥勉強以外で今一番興味があることについては、ゲーム・絵・料理とさまざまであったが、将来の進路とは結びついていない、と結果を述べている。

さらに、中野は、量的データを得るために上記の調査結果をもとにアンケートを作成し、公立中学校2年生54名にアンケートを行った。アンケートの内容は、①授業・教師・クラスの影響について、②先行経験・称賛に関して、③将来・進路に関して、④英語に関して、⑤英語力を問う設問、の5項目を設定した。

このアンケート調査の結果、「英語が好きである」、「英語が得意である」という質問に英語の得点との関連が見られた。「英語が好きである」と回答した生徒は、「英語が嫌いである」と回答した生徒よりも英語の得点が20点ほど高く、同様に「英語が得意である」と回答した生徒は、「英語が得意ではない」と回答した生徒よりも英語の得点が15点ほど高いという結果が出た。また、「自分の将来に英語は必要だから、英語を頑張ろうと思う」という質問でも英語の得点との関連が見られ、「自分の将来に英語は必要だから、英語を頑張ろうと思う」と回答した生徒は、「自分には将来英語は必要ないので、英語を頑張ろうとは思わない」と回答した生徒と比べて英語の得点が25点ほど高いという結果が出た。

この結果から、中野は英語の学力を高めるためには「英語が好きだ」、「英語が得意だ」、「将来自分には英語が必要だ」と感じさせることが重要であるとし、中学校の英語学習において動機づけを高める理想的な指導ストラテジーとして、1. 英語の授業に対する抵抗感をなくす、2. 英語の授業の安心感を高める、3. 英語の授業において満足感・達成感を与える、4. 異文化である英語の奥行きを伝えること、を提案している。

3-5 中学校外国語教育の動機づけに関するまとめ

中学校の外国語教育における動機づけをまとめると、学力向上のためには生徒自身のやる気・意欲が不可欠であり、動機づけには外発的動機づけと内発的動機づけの2つに分類され、内発的動機づけが重視されているように見えるが、実際は内発的・外発的動機づけをそれぞれリンクさせる形が望ましいとすることができる。さらに、中野の研究結果から、中学校外国語学習においては「英語が好きだ」、「英語が得意だ」、「自分には将来英語が必要である」と生徒に感じさせるような動機づけが効果的であることがわかる。すなわち、教師の動機づけによって生徒の学習に対するやる気、意欲を上げることができれば、生徒の学力向上につながる可能性があることがわかる。

以上を踏まえて、本研究では中野の研究結果を参考に「どのようなときに英語が好きだと感じるのか」、「どのようなときに英語が得意だと感じるのか」、「なぜ将来英語が必要だと感じるのか」を調査し、中学生の外国語学習に対する動機づけに有効な授業内容を提言していきたい。

4. 調査

4-1 調査の目的

この調査では、外国語教育の学力向上のためにどのような内容、方法を通して動機づけをすることが効果的なのかを調べることを目的とし、中野の研究結果を参考に、①中学校時代、英語が好きであったか、②中学校時代、英語が得意であったか、③中学校時代、将来自分には英語が必要だと感じていたか、の3項目について調査を行う。

4-2 調査対象者

新潟県内の大学生65名

4-3 調査期日

2012年12月14日

4-4 集計方法

調査は質問1から質問5の5つの質問から構成されている。中学校を卒業して少しでも時間が経っていない方がより確実な結果が得られることを考慮し大学1年生が最も多く履修する授業で調査を実施した。

質問1は、それぞれの学年と性別を選択してもらうものである。

質問2は、出身中学校の校種と卒業年を選択してもらうものである。

質問3は、中学校時代に英語が好きだったかを「はい」か「いいえ」で選択してもらい(3-(1))、3-(1)の質問で「はい」を選択した人には中学校時代どのようなときに英語が好きだと感じたか(3-(2))、「いいえ」を選択した人には中学校時代どのような授業だったら英語が好きになっていたと思うか(3-(3))をそれぞれ選択肢の中から複数回答可能な形で丸を付ける形式をとった。

質問4は、中学校時代に英語が得意だったかを「はい」か「いいえ」で選択してもらい(4-(1))、4-(1)の質問で「はい」を選択した人には中学校時代どのようなときに自分は英語が得意だと感じたか(4-(2))、「いいえ」を選択した人には中学校時代に英語が苦手だと感じていた原因はなんだと思うか(4-(3))をそれぞれ選択肢の中から複数回答可能な形で丸を付ける形式をとった。

質問5は、中学校時代に将来英語は必要だと思っていたかを「はい」か「いいえ」で選択してもらい(5-(1))、5-(1)の質問で「はい」を選択した人には中学校時代なぜ将来英語が必要だと考えていたのか(5-(2))、「いいえ」を選択した人には中学校時代なぜ将来英語は必要ないと考えていたのか(5-(3))をそれぞれ選択肢の中から複数回答可能な形で丸を付ける形式をとった。

4-5 調査結果の分析

以下では、調査の結果に基づいて分析を行う。

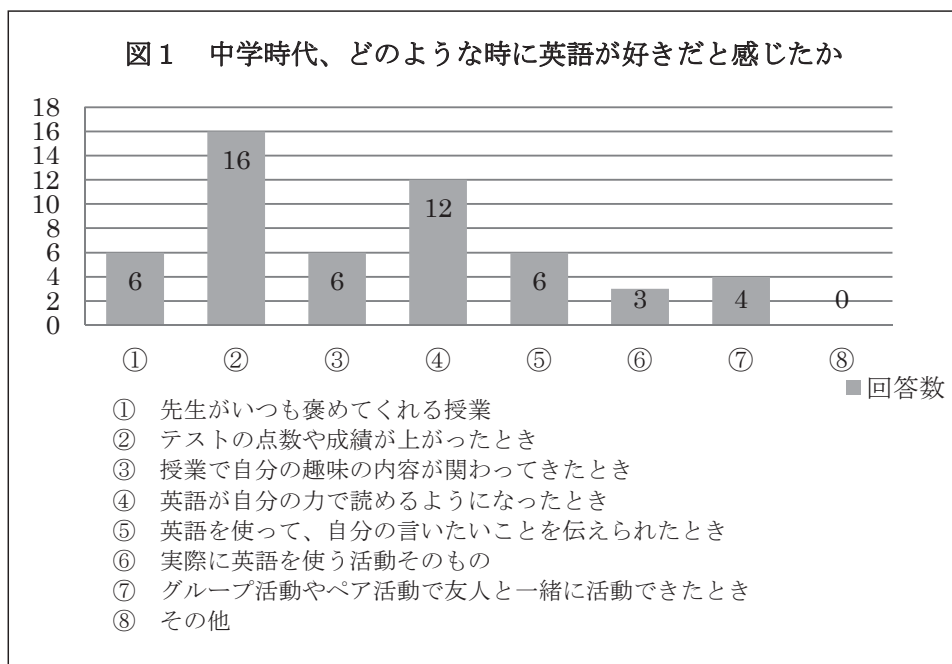
質問1では、調査人数は全65名中、1年生が54名、2年生が9名、3年生が1名、不明が1名であった。

質問2では、調査人数全65名中、公立中学校出身者が54名、私立中学校出身者が8名、国立中学校出身者が1名、不明が2名であった。卒業年は2009年卒業が47名、2008年卒業が8名、2007年卒業が4名、2006年卒業が2名、2003年卒業が1名、不明が3名であった。

質問3-(1)では、「中学時代、あなたは英語が好きでしたか？」という質問に対して、「はい」と回答し

た人が24名、「いいえ」と回答した人が40名、無回答が1名という結果であり、全体の約3分の2が中学生当時、英語は嫌いであったという回答であった。

質問3-(2)では、質問3-(1)で「はい」と回答した人にも「どのようなときに英語が好きだと感じたか」を選択肢の中から複数回答可能で選択してもらった。図1は、「中学時代、どのような時に英語が好きだと感じたか」という質問に対しての選択肢の内容と回答数の結果をグラフ化したものである。

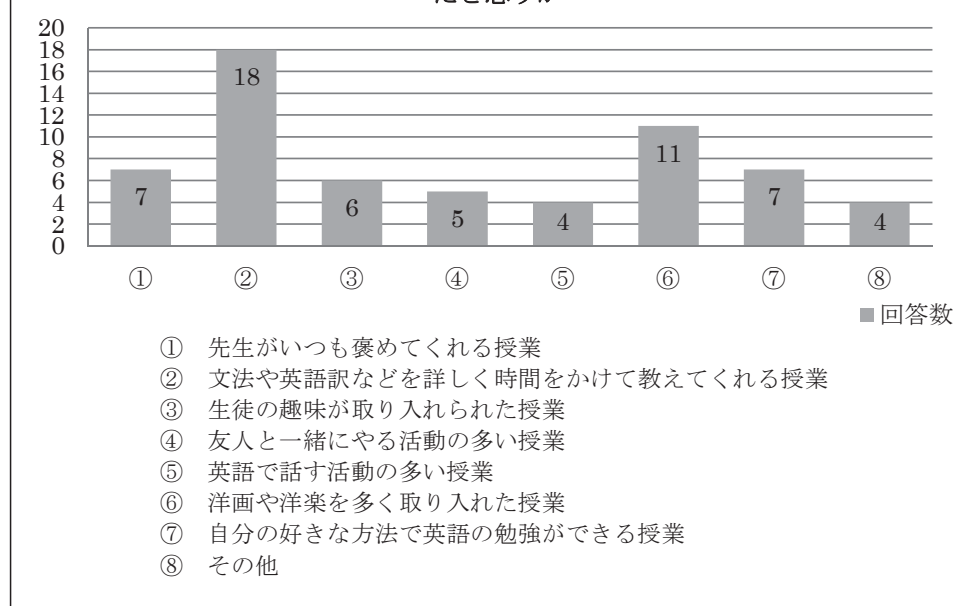


〈筆者作成〉

図1からわかるように、中学生が英語を好きだと最も感じる瞬間は「テストの点数や成績が上がったとき」であった。この結果から、生徒たちは自分で学習したことが学校の成績に反映することを望んでいることがわかり、成績が上がることに比例して英語を好きだと感じる事がわかる。2番目に回答数が多かったのは、「英語が自分の力で読めるようになったとき」であった。この回答が「英語を使って、自分の言いたいことを伝えられたとき」よりも回答数が2倍ほど多かったことから、生徒たちは「話すこと」よりも「読むこと」を重視していることがわかる。さらに、英語が好きな生徒たちにとっては先生からの称賛や自分の興味、活動に対する喜びはあまり関係がないようであり、あくまでも成績や自分の実力として反映されていることが重視されていることがわかる。

質問3-(3)では質問3-(1)で「いいえ」と回答した人にも「どのような授業だったら英語が好きになっていたと思うか」を選択肢の中から複数回答可能で選択してもらった。図2は、「中学時代、どのような授業だったら英語が好きになっていたと思うか」という質問に対しての選択肢の内容と回答数の結果をグラフ化したものである。

図2 中学時代、どのような授業だったら英語が好きになっていたと思うか



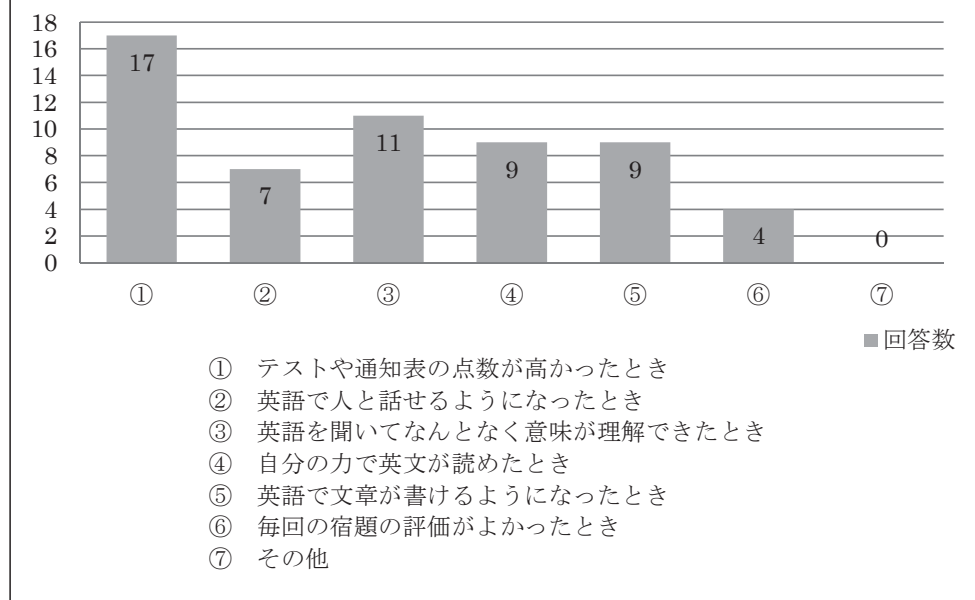
<筆者作成>

図2からわかるように、英語が嫌いな生徒は「文法や英語訳などを詳しく時間をかけて教えてくれる授業」を最も望んでいるようだ。このことから、英語が嫌いな生徒たちであっても「英語がわかるようになりたい」、「英語の成績を上げたい」という気持ちを持っていることがわかる。次いで多かった回答は「洋画や洋楽を多く取り入れた授業」であった。洋画や洋楽は個々の生徒が持つ趣味や関心よりも生徒の動機づけに良い影響を与えるようである。それ以外の回答は比較的に高い数値を表してはおらず、先生からの称賛や英語を使った活動そのものが必ずしも生徒の意識に影響しているわけではないことがわかる。その他の回答では、「英語が好きになることはない」、「勉強がしっかりとできる静かな環境」、「不良のいないクラス」、「先生がまともでおもしろい授業」という回答があった。

質問4-1(1)では、「中学時代、あなたは英語が得意でしたか？」という質問に対して、「はい」と回答した人が23名、「いいえ」と回答した人が41名、無回答が1名という結果であり、質問3-1(1)と同様に全体の約3分の2が中学生当時、英語は苦手であったという回答であった。

質問4-1(2)では、質問4-1(1)で「はい」と回答した人にも「どのようなときに自分は英語が得意だと感じたか」を選択肢の中から複数回答可能で選択してもらった。図3は、「中学時代、どのようなときに自分は英語が得意だと感じたか」という質問に対する選択肢の内容と回答数の結果をグラフ化したものである。

図3 中学時代、どのようなときに自分は英語が得意だと感じたか

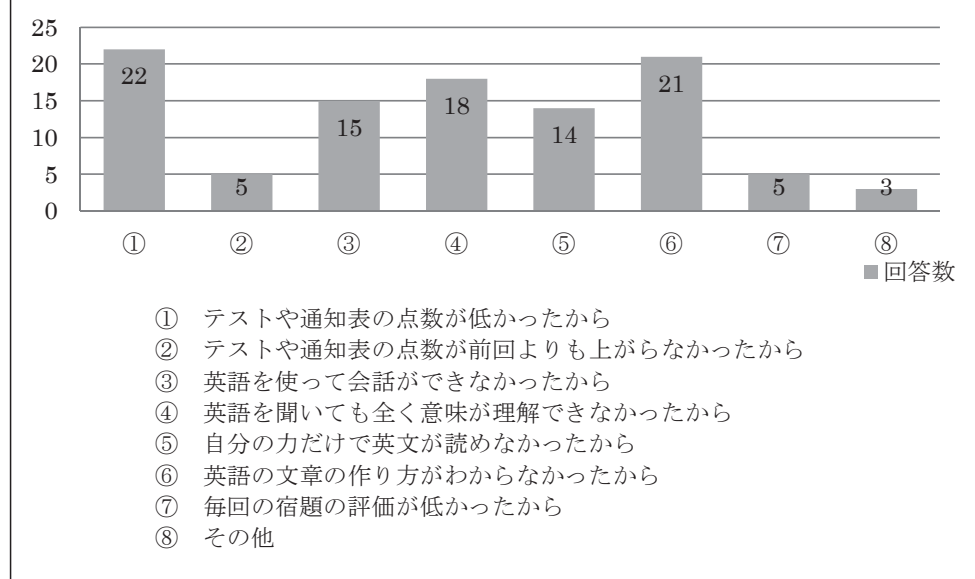


<筆者作成>

図3から、中学生が自分は英語が得意だと最も感じる瞬間は「テストや通知表の点数が高かったとき」であった。中学生にとって、英語が実際の現場で使えることよりも授業の科目としての扱いが重要視されており、科目として点数に反映することは「英語が好きだと感じるようになること」、「英語が得意だと感じること」に直接的につながる可以看出。質問3-(2)では、「読むこと」、「聞くこと」、「話すこと」、「書くこと」の4技能についての選択肢も加えた。結果として、英語が得意だと感じる要因としてそれほど大差はなかったが、4技能の中では「聞くこと」の分野である「英語を聞いてなんとなく意味が理解できたとき」が最も「自分は英語が得意だ」という動機づけにつながるようである。

質問4-(3)では、質問4-(1)で「いいえ」と回答した人にも「英語が苦手だと感じていた原因は何か」を選択肢の中から複数回答可能で選択してもらった。図4は、「英語が苦手だと感じていた原因は何か」という質問に対しての選択肢の内容と回答数の結果をグラフ化したものである。

図4 中学時代、英語が苦手だと感じていた原因はなんだと思うか



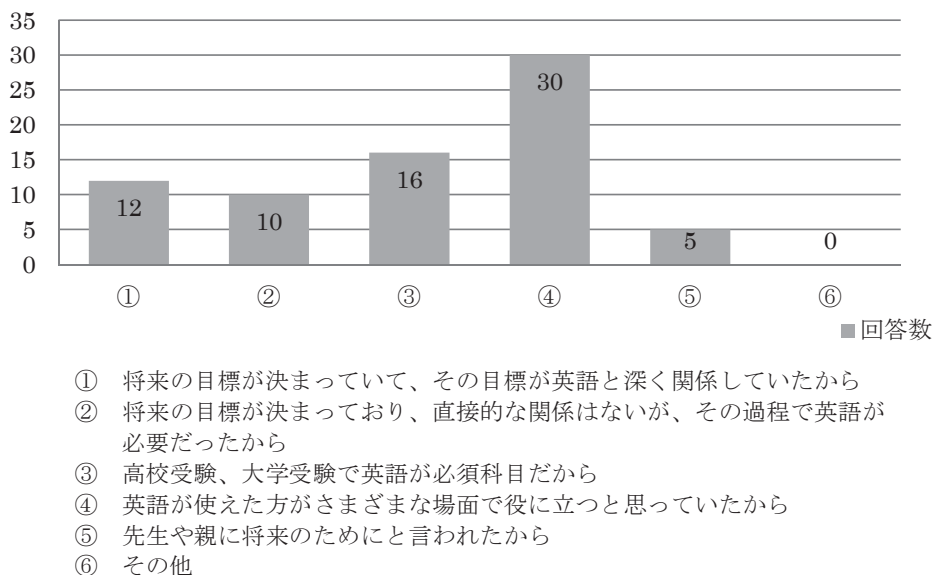
<筆者作成>

図4からわかるように、中学時代、英語が苦手だと感じていた原因の最たるものは「テストや通知表の点数が低かったから」であった。この結果から、中学生は英語をコミュニケーションのためのものとして意識しているのではなく、1つの科目として成績を重視していることがわかる。この質問でも「読むこと」、「聞くこと」、「話すこと」、「書くこと」の4技能に関する選択肢を加えたが、「英語の文章の作り方がわからなかったから」という回答が多かったことから、中学生が最も苦手意識を持っているのは「書くこと」であることがわかる。だが、4技能それぞれの回答数にあまり大差は見られないようだ。その他の回答には「そもそも日本語がしっかりしていない」、「最初の文法でつまずいた」、「成績は普通だったが、好きではなかった」という回答があった。

質問5-(1)では、「中学時代、あなたは将来英語は必要だと思っていましたか？」という質問に対して、「はい」と回答した人が43名、「いいえ」と回答した人が21名、無回答が1名という結果であり、全体の約3分の2が中学生当時、将来英語は必要だと思っていたと回答した。

質問5-(2)では、質問5-(1)で「はい」と回答した人にも「なぜ将来英語が必要だと考えていたのか」を選択肢の中から複数回答可能で選択してもらった。図5は、「なぜ将来英語が必要だと考えていたのか」という質問に対しての選択肢の内容と回答数の結果をグラフ化したものである。

図5 中学時代、なぜ将来英語が必要だと考えていたのか

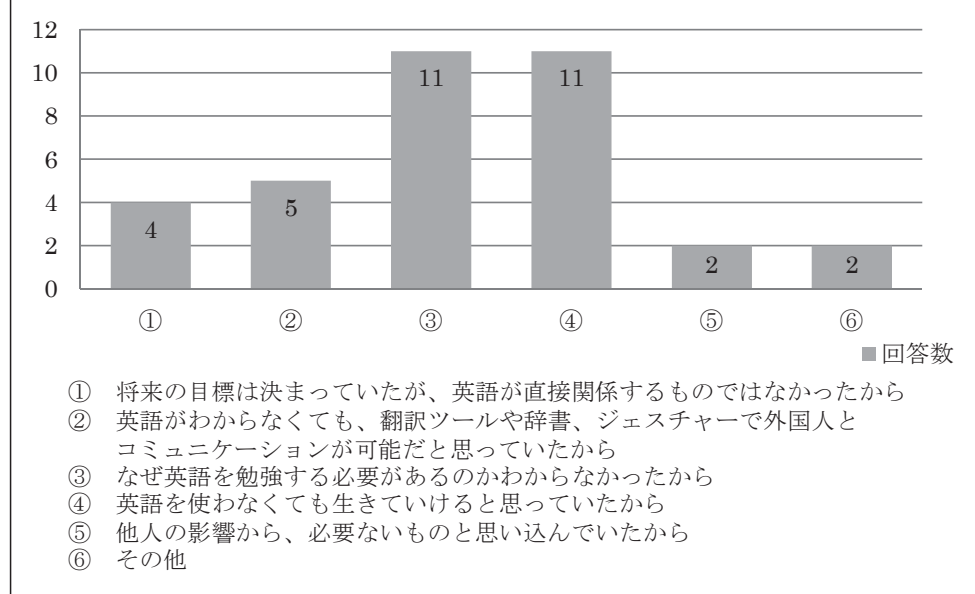


<筆者作成>

図5から、将来英語は必要だと考えていた人の半数以上が「将来英語が使えた方がさまざまな場面で役に立つと思う」と回答していた。もちろん、高校受験や大学受験で必要だと考えていた人もいれば、現代社会のグローバル化に伴ってコミュニケーションのツールとして英語が必要だと考えていた人もいたことが考えられる。しかし、選択肢③の「高校受験、大学受験に英語が必須科目だから」と、選択肢④の「英語が使えた方がさまざまな場面で役に立つと思っていたから」の回答数に半数近くの差があることから、どの生徒も英語を完全に学校の教科として意識している傾向にあることがわかるが、コミュニケーションのためのものとしても少なからず意識していることがわかる。また、英語が嫌いであり、苦手だった人でも、将来英語が必要であると考えていた人が20名ほどいた。このことから、英語が嫌いであること、英語が苦手であることは、将来英語が必要ではないという意識とは必ずしも関係がないことがわかる。将来の目標が決まっていた人数は、全体の集計人数65名の内、約3分の1であった。将来の目標とは関係なく英語を必要なものとして考えている人もいるようである。

質問5-(3)では、質問5-(1)で「いいえ」と回答した人だけに「なぜ将来英語が必要ないと考えていたのか」を選択肢の中から複数回答可能で選択してもらった。図6は、「なぜ将来英語が必要ないと考えていたのか」という質問に対する選択肢の内容と回答数の結果をグラフ化したものである。

図6 中学時代、なぜ将来英語は必要ないと考えていたのか



<筆者作成>

図6から、中学生が英語を必要ではないと考える理由で最も回答が多かったのが、「なぜ英語を勉強する必要があるのかわからなかったから」、「英語を使わなくても生きていけると思っていたから」であり、英語を勉強する意味が見出せていない生徒が多いことがわかった。また、「将来英語は必要ない」と考えていた人たちは「英語が嫌い」、「英語が得意ではない」に当てはまる人たちがほとんどであった。その他の回答には、「外国が嫌いだから」、「外国に行くことがないから」という回答があった。

4-6 調査の考察

以下では、調査結果に基づいて中学生の外国語教育における学力向上のために効果的な動機づけについて考察する。なお、質問1では学年と性別を、質問2では校種と卒業年を尋ねた。質問1では学年と性別の違いによって趣味や関心が異なることを予想し、質問2では校種と卒業年の違いにより学校での指導内容が異なることを予想して動機づけの方法に変化が見られることを考慮したが、特に大きな変化は見られなかったので除くこととする。

質問3では、「どのようなときに英語が好きと感じるか」を調査した。その結果、「テストの点数や通知表の成績が上がったとき」、「自分の力で英文が読めたとき」、「文法や英語訳などを詳しく時間をかけて教えてくれる授業」が最も英語を好きになりやすいことがわかった。結果から生徒たちが「自分は英語がわかるようになりたい」という気持ちを持っており、英語が読めるようになったときに英語が好きと感じやすいことがわかるので、英語を実際に使う活動も少なからず必要ではあるが、まず文法や英語を読めるようになることを意識し、自分はある程度は英語がわかるという意識を持たせた方が後の英語に対する意

識が高まってくることが考えられる。また、生徒の持つ興味や趣味に訴えるよりも、洋画や洋楽を用いた方が効果的であることがわかるので、生徒の英語への意識を高めるために洋画や洋楽は積極的に利用していくべきだろう。

質問4では、「どのようなときに英語が得意だと感じるか」を調査した。その結果、中学時代英語が得意だった人は「テストや通知表の点数高かったとき」に最も英語が得意と感じ、英語が苦手だった人になぜ苦手だったのかを質問したところ、「テストや通知表の点数が低かったから」という回答が最も多かったことから、テストや通知表で高得点を得られることが「英語が得意」だという意識に最もつながりやすいことがわかった。そのため、単元ごとに小テストを入れてテストで高得点を取る機会を増やすことが必要だと考える。加えて、単元ごとにテストを行うことにより、単元として何が苦手かを知ることも可能だ。実際、辰野はテスト結果の活用法として「どこを、どのように間違えたかを調べることで、自分の学力についての長所・短所を知ることができます。そして、これによって、今後の学習の仕方もわかり、意欲もわいてくるのです」¹⁷と述べ、結果を活用することで学習意欲を高めることができることを強調している。テストを頻繁に行うことで高得点を取る機会を与えることができれば「自分は英語が得意だ」と学習への意欲も上がり、たとえ点数が取れなかったとしても結果を見直すことで次回の学習への意欲を高めることが可能だろう。

「読むこと」「聞くこと」「話すこと」「書くこと」に関しての苦手意識はそれぞれ大差は見られなかったことから、全ての技能に対して教師は詳しい説明を持って生徒に指導をする必要があるだろう。これは、質問3-(3)の選択肢「文法や英語訳などを詳しく時間をかけて教えてくれる授業」を生徒が求めていることにも対応させることができる。しかし、英語が得意だと最も感じる瞬間は「聞くこと」の技能であったことから、この部分は力を注いでもよいだろう。これは、質問3-(3)の選択肢「洋画や洋楽を多く取り入れた授業」を生徒が求めていることにも対応させることができる。

質問5では、「なぜ将来英語が必要だと考えていたのか」を調査した。その結果、全体の3分の2が「将来英語は必要である」と回答していたことから、たとえ英語が嫌いであり苦手であったとしても、自分の将来のために英語が必要だと感じている人が多いことがわかった。これはすでにわかっている学力向上のために有効な動機づけの1つなので、「将来英語が必要ではない」と回答した人に関して考察を進める。

「将来英語は必要ではない」と回答した人たちはほぼ全員が「英語が好きではない」、「英語が得意ではない」と回答していることから、この3つの「英語が好きではない」、「英語が得意ではない」、「将来英語は必要ない」は関連があることが考えられる。すなわち、英語を好きになったり得意になれば、将来英語が必要だと考える可能性もあり、その逆も考えられる。「将来英語は必要ではない」と回答していた人は「なぜ英語を勉強する必要があるのかわからなかったから」、「英語を使わなくても生きていけると思っていたから」と多く回答していることから、彼らは英語を勉強する意味が見出せていないことがわかる。そのため、英語は勉強しなければならないものとして強制させるのではなく、なぜ英語を勉強するのか、英語を勉強することによって日本で生活する中でどのようなメリットがあるのか、英語が自分の将来にどのように活かされるのかを生徒たちに指導する必要がある。それを理解することができれば、それが学力向上のための動機づけの1つとなるだけでなく、英語を好きになること、英語が得意になることへのきっかけとして働くことも考えられる。

5. 調査結果から見る授業方法の考察

今回の調査結果から、①生徒たちはテストで良い点数が取れたときに英語を好きに、得意に感じるこ

と、②英語を使った活動に力を注ぐのではなく、生徒は文法や英語訳など、教師に詳しい説明のある授業を求めていること、③英語が読めるときに生徒は英語が好きだと感じ、英語が聞けるときに英語が得意だと感じること、④生徒たちは英語の好き嫌い・得意不得意にかかわらず、英語を将来必要なものとして考えている生徒が多く、将来必要なものとして考えていない生徒には、なぜ必要なかを理解させることが重要なこと、という結果が得られた。ここから、この結果を授業の中に教師がどのように組み込むことができるかを提案していきたい。

まず、普段の授業として、生徒は、文法や英語訳などの詳しい説明を授業で求めていることから、教師はより多くの時間をかけ各単元の本文や文法の基礎を定着させ、より詳しい解説を心掛けて正しく理解できているかを確認する必要がある。さらには、生徒が正しく理解できているかを授業中に確認し、生徒に質問を求める時間を持つことも方法としてよいだろう。もちろん、その場で質問をすることが難しい生徒がいることも予想できるので、授業後や放課後に質問の時間を持つことは言うまでもない。

授業はそれぞれ教科書のUnitのような単元を1区切り数時間に分けて行っているところが多いだろう。単元ごとの構想にしても、読む活動を授業の初めの方に行うことで、その単元の学習に意欲を持つことができれば、後の「聞くこと」、「話すこと」、「書くこと」の活動に対しても意欲を持ちやすくなるだろう。その際も、和訳や文法に力を入れて解説することで、生徒たちの英語を好きになる気持ちに訴えられることが想像できる。

時には、生徒の関心に訴えることも重要だ。洋画を観たり洋楽を聞く時間を頻繁に持つことで、生徒の関心に訴えることができる。その上、聞くことは生徒の英語を得意になる気持ちに訴えることができるので、授業で頻繁に取り込むことはとても効果的だと考える。

私が最も重要だと考えていることは、単元の終了ごとに小テストを組み込むことだ。テストで良い点数を取ることは、どの生徒に対しても生徒の英語を好きになる気持ち、英語を得意になる気持ちに直に訴えることができる。生徒にやる気を持たせるために簡単なテストを作成することも必要かもしれないが、正しく内容が理解できているかを確認できるものでなければならない。テスト後には結果を確認させ、どこをどのように間違えたのか確認する時間を取ることも必要だ。これは生徒に長所と短所を気づかせ、たとえ点数が低かったとしても次回の学習意欲につなげる可能性があるからである。

調査の結果から、ほとんどの生徒は将来に必要なだという意識を持っていることは分かったが、将来に必要なと感じている生徒のためにも、中学校で英語を学習する意味を生徒に理解させる必要がある。これは各授業で行う必要のないことではあるが、各単元で学ぶ内容がどのような場面で使えるのかを生徒に指導することも必要ではないかと私は考えている。

以上が、研究結果から見る、学力向上のために私が提案する授業方法である。なお、ここで述べたのは研究結果から見る授業方法の提案であり、授業現場での実践を通してこの提案を証明することができるかが今後の課題である。

6. 研究のまとめ

本研究は、中野の研究結果¹⁸を参考に、生徒への動機づけに注目して学力向上のために必要な動機づけを挙げ、生徒はどのようなときに学習に対する高い意識を持つのかを調査し、生徒に学習に対するやる気を持たせるために教師はどのような授業をするべきなのかを考察することを目的とした。

調査の結果から、生徒が外国語学習に対して高い意識を持つ条件と、将来の英語の必要性に関して、次の4つのことがわかった。

1. 生徒はテストの点数が上がったときに英語を好きに・得意に感じる。
2. 生徒は文法や和訳などを詳しく時間をかけて指導してくれる授業を受けているときに英語が好きだと感じる。
3. 生徒は「読むこと」に対して好きと感じ、「聞くこと」に対して得意と感じる。
4. 多くの生徒が将来の英語の必要性を感じている。

さらに、以上の4つの結果から、教師の行う英語の授業において、生徒のやる気を引き出す動機づけとして次の4点を授業に取り入れることが効果的だと考察できた。

1. テストの点数を上げる機会を増やすため、單元ごとにテストを行うこと。
2. 文法や和訳などを詳しく時間をかけて指導すること。
3. 生徒への動機づけのために「読むこと」と「聞くこと」を意識すること。
4. 将来英語は必要だと思っていない生徒に対して、英語が将来どのように役に立つかを正しく指導すること。

以上の点を意識して授業に取り込むことにより、生徒の学習に対するやる気を引き出し、学力向上へとつなげることが可能だと考えられる。

本研究で行った調査結果から、生徒たちは英語をわかるようになりたいという意味を強く持っている傾向にあると考えられ、英文の作り方や英語の読み方に意識を強く集中していることがわかった。すなわち、コミュニケーションとしての英語という意識が薄れており、1つの教科としての英語という意識を強く持っていることが想像できる。しかし、中学校学習指導要領には外国語の目標に「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」¹⁹と書かれているため、たとえ動機づけのためであったとしてもどれか1つの技能に固執して指導することは望ましくないし、英語はコミュニケーションを目的としていることを生徒たちに理解させる必要がある。動機づけとしては「読むこと」、「聞くこと」の技能が有効であることはわかったが、「話すこと」、「書くこと」に関しても有効な動機づけを見つけて指導ができれば、全ての技能において生徒にやる気を持たせることが可能だろう。

本研究では、「動機づけとは他者が人にやる気を出させるように振る舞い、行動を引き起こさせ、方向付けをさせ、持続させ、実際に目標を達成させるための過程」と定義し、生徒に学習に対するやる気を持たせるために教師はどのような授業をするべきなのかを考察した。教師として生徒にやる気を出させることは特に重視すべき点だと私は考える。なぜなら、生徒が学習に対してやる気を持つことは生徒の自発的な学習を促し、学力の向上へと導くからである。そのためには、生徒たちが授業に対して何を求めているのかを常に理解していく必要があると私は考える。生徒がいてこそその教師であり授業であろう。そのことを常に意識し、個々のニーズや学習事情に対応して授業を行うことが教師に求められるだろう。今後は、4技能全てを考慮して生徒にやる気を持たせる授業方法を考察し、実際の授業現場で立証してみることが課題である。

註

- 1 辰野千壽『学び方の科学』図書文化社、2006年、62頁。
- 2 中野誠之、佐野富士子「中学校英語学習における動機づけを高める指導ストラテジー」『横浜国立大学教育人間科学部紀要』I（教育科学）横浜国立大学教育人間科学部、2009年、77 - 95頁。
- 3 村山士郎『希望としての学力 豊かなことばと表現が学力の土台』桐書房、2003年、71頁。なお、筆者は本書にて、①学力の要素として、それぞれの教科の内容に即して基本的な事柄をおぼえたり、習得する学力の構成部分、②おぼえたり、習得したりしたものをその法則や成り立ちを理解しながら系統的に認識する部分、③上記の①と②を基礎・基本とするなら、その基礎・基本を自分の生活や生き方と関わらせながら、各個人の意味づけや見解・評価を作り上げる部分、としている。
- 4 桜井茂男・浜口佳和・向井隆代『子どものこころ 児童心理学入門』有斐閣、2003年、112頁。
- 5 辰野千壽『学び方の科学』図書文化社、2006年、62頁。
- 6 前掲書、62頁。
- 7 中城進『教育心理学』二瓶社、2006年、88頁。
- 8 森敏昭、秋田喜代美（編）『教育心理学キーワード』有斐閣、2006年、30頁。
- 9 辰野千壽『学び方の科学』図書文化社、2006年、64頁。
- 10 前掲書、64頁。
- 11 桜井茂男・浜口佳和・向井隆代『子どものこころ 児童心理学入門』有斐閣、2003年、120頁。
- 12 辰野千壽『学び方の科学』図書文化社、2006年、64頁。
- 13 前掲書、64頁。
- 14 J.M.ケラー著、鈴木克明監訳『学習意欲をデザインする ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン』北大路書房、2010年、19頁。
- 15 前掲書、18頁。
- 16 中野誠之、佐野富士子「中学校英語学習における動機づけを高める指導ストラテジー」『横浜国立大学教育人間科学部紀要』I（教育科学）横浜国立大学教育人間科学部、2009年、77 - 95頁。
- 17 辰野千壽『学び方の科学』図書文化社、2006年、145頁。
- 18 中野誠之、佐野富士子「中学校英語学習における動機づけを高める指導ストラテジー」『横浜国立大学教育人間科学部紀要』I（教育科学）横浜国立大学教育人間科学部、2009年、77 - 95頁。
- 19 文部科学省『中学校学習指導要領』東山書房、2009年、105頁。

参考文献

- 1 鎌原雅彦・竹綱誠一郎『やさしい教育心理学』有斐閣、2005年。
- 2 辰野千壽『学習意欲の高め方・改訂版』図書文化社、1987年。
- 3 永野重史『子どもと教育 子供の学力とは何か』岩波書店、1997年。
- 4 谷友雄、元兼正浩『こうすれば学力は伸びる』ぎょうせい、2006年。
- 5 鈴木忠夫『学校英語はなぜ悩めるか』リーベル出版、2000年。
- 6 松村昌紀『英語教育を知る58の鍵』大修館書店、2009年。

(卒業論文指導教員 伊藤敦美)